

《第 54 回弘明寺サロン開催記》

“知る、喜びの彼方に” 「第九」演奏会までの軌跡



2017 年 3 月 26 日、東京芸術大学奏楽堂において開催された「第九」特別演奏会

今回の弘明寺サロンは、放送大学南関東 7 ブロック学習センターが共同して取り組み、その中で学生側代表として「第九」特別演奏会の実行委員長を務められた馬場信一さんをお願いして、取り組み開始から 2017 年 3 月 26 日の演奏会開催に至るまでの軌跡についてご講演をいただいた。

と き : 2017 年 6 月 13 日 (火) 14:00~17:00

と ころ : 第 8 講義室

演 題 : 『“知る、喜びの彼方に” 「第九」演奏会までの軌跡』

講 師 : 馬場 信一氏

参加者 : 45 名



【講師コメント】

放送大学南関東 7 ブロックの学生・教職員がベートーヴェン第九交響曲合唱に取り組みました。音楽指導の先生方に導かれて面接授業やゼミで、本学最初の演奏プログラムを、学生らしく“学び”・“歌う”を基本に 2 年にわたり取組んだ軌跡は、言うは易く行うは難し。大変な末に「歓喜」と出会う怖さと期待に動悸が高鳴る日々が続きました。

《講師略歴》

昭和 11 (1936)年 横浜市に生まれる(80 歳)

平成 5(1993)年 NTT 定年退職

平成 19 年 放送大学 入学

平成 24 年 同 「人間と文化」卒業

平成 25 年～ 「人文学プログラム」全科 在学中、

平成 27 年～ 「心理と教育」在学中

神奈川合唱団 運営委員 代表

放送大学南関東7学習センター ベートーヴェン「第九」特別演奏会 実行委員長

〔当日の弘明寺サロン・プログラム〕

1. DVD・「ベートーヴェン『第九』特別演奏会 ―知る、喜びの彼方に―」の第4楽章を鑑賞。放送大学が作成した3種類のDVDの中の全曲を収録したもの。
なお、放送大学では「大学の窓」で適宜放映している。
2. 学歌斉唱
今回の「第九」の指揮者山本純ノ介先生がオーケストラバージョンに編曲したものを放送大学学長岡部洋一先生が指揮したDVDを視聴しながら参加者全員で斉唱
3. 馬場信一氏による講演
4. アイルランド民謡「春の日の花と輝く」合唱
新井ゆう子先生の指導・ピアノ伴奏で、神奈川合唱団有志による合唱。当日の参加者も参加。
5. 澤村雅嗣さんの指導で太極拳「呼吸法」を行って終了
6. そのあと場所を「玄や」に移して懇親会

【講演要旨】

「第九」の誕生は・・・

池田学習センター所長から「放送大学で「第九」を歌おうと思うが手伝ってくれないか」と話があった。神奈川合唱団持ち帰って相談したら「いいのではないか」ということになった。

なお、池田所長から「第九」誕生に至るいきさつについてお話しをお聞きした。

2014年3月、足立センターの富永所長の送別の席で、

- ・「放送大学で第九を歌えないだろうか・・・」と多摩センターの田崎所長の独り言があり
- ・一同「・・・」しばし沈黙しまって声が出なかった。が ややしばらくしてから・・・
- ・「できないことはないけれど・・・」千葉の宮野所長が言われた。
- ・そのあと、また皆しばし沈黙が続き・・・、
やがて「面白そうですね。やりましょう」と神奈川の池田所長の言葉へと続いたのがすべての始まりであった。と伺っております。
- ・「第九」の難しさを熟知している宮野先生から、学習センター所在地周辺の大学から音楽専門の先生方の応援を頂き、お力をお借りして進める(案)が出され、周辺大学から10人の先生方が選ばれ、その方々とのと打合わせが重ねられ「基本(案)」がまとまりました。

- ・当初、音楽指導の先生方から「放送大学の学生は毎日学校へ来ているわけではないので練習ができるのか心配ですね。大丈夫かしら？ 年齢的にも高齢者が多く無理ではないか？」などの発言もあったが、池田所長から「学生も社会経験豊富な方が多く、放送大学はかなりの人材の宝庫である。やってみましょう。皆が集まってくると思う。」ということになって始めることになった。と言っておられました。

最初・・・は、恐る恐るユメを呟いた田崎所長は、翌年退任されましたが、演奏会に参加された折に「私の独り言が実現したなんて恐いようです」。『第九』といったが、言うは易し、行方は難しである。南関東7学習センター所長の絆の強さと打てば響く心意気の高さに感激しています」と挨拶されました。



左端は宮野所長、右端は池田所長



岡部学長（いずれも懇親会におけるスナップ）

「第九」プロジェクトスタート

1. 町の合唱団の演奏会運営状況の把握から始まる

平成 26 年 12 月頃、池田先生から「音指導の先生方 10 人が決まりました。町の合唱団はどのように運営されているんだろうか。」と聞かれ調べてみることにしました。

放送大学の学生で合唱団に参加している皆さんからヒアリングを行いました。横浜、川崎、大磯、藤沢、逗子、秦野などの合唱団員から話を聞き、練習回数、運営方法、合唱団員、会費、指揮者名などヒアリングした結果を表にまとめ所長に提出した。

池田所長は、その内容を所長会議で紹介されたようで、後日、町の合唱団の様子はわかったが、どのくらいの費用がかかるか予測しておく必要がある。

川崎の合唱団の会計報告をもとに、この程度のことをやると 850 万円くらいは必要になるのではないか。と赤松さんから報告してもらった。

2. 演奏会場、奏楽堂

「第九」の演奏会を放送大学は何処でどのように行うか、演奏会はこの音楽ホールで開催するかなどが検討され南関東の学生が集まると人数が多くなるので、東京都内の会館や音楽ホールが検討され、放送大学の「卒業者の集い」を行っている NHK ホールで卒業式の後を利用してはどうか。などが検討されていたようです。

- ・しかし、NHK ホールは、予約数が多く、数年先までの日程が決まっており予約が取りにくい。非常に高額で放送大学で借りられるような状況ではないということが分かった。音楽指導の先生方は、宮野所長はじめ 10 人のうち 9 人が東京藝術大学の OB であることか

ら、「自分たちの母校の奏楽堂が良いのではないか」ということになったようです。

運よく、藝大の卒業式直前の3月25・26両日が借りられることになり、3月25日総リハーサル、26日の午前ゲネプロ、午後が演奏会という日程が決まった。

利用料金は、藝大が値上げを検討していることが、後日判明し予算獲得に苦心されたようです。値上げ前の値段で借りられることを願いつつ？

日本でも最高の音楽ホールである。「ここで歌えるならば、かなり多くの参加者が期待できるのではないか」との思いもあったようです。

藝大の奏楽堂は、座席はNHKホールの半分程度の1,100人ほどしかないが、値段はNHKホールより安い、それでも2日間で2百数十万円使用料が必要で相当な金額である。

最終的に学校所長裁量経費、7学習センター所長経費と学生の負担金で進めることになった。

3、プロジェクトの推進

(1)「学ぶ」・「歌う」を基本に 面接授業スタート

南関東の各学習センターから参加者を募り練習を行う。大学らしく、「学ぶ・歌う」を基本に進めることになった。

「学ぶ」：作詞者や作曲者の生きた時代背景など中世音楽家の中で、シラーはどういう思いで作詩したのか、ベートーヴェンがどういう思いで作曲をし、彼等はどのような生活していたかを知ることが歌うのにも役に立つのではないかと、多くの面接授業が計画されていた。

神奈川では2015年4月と2016年12月に小宮正安先生の西洋音楽史「第九に親しむ(社会・文化史篇)」授業からスタートしました。

(2) 参加者を募り、練習開始

面接授業に参加した方々に案内チラシにより参加を呼びかけすることにした。

4月の小宮先生の面接授業には100人近くの方が参加したので、そこでチラシを配り、池田所長からあいさつを頂き、勧誘を行った。その結果約30人の参加の意思を示され、最初の勧誘でこれだけ集まったので、「これなら順次増えていくかも」？と不安ながら進めることに手ごたえも感じられた。

歌唱指導などの実技は、中嶋先生が担当して頂くことになっていたが、先生は横浜国大の教授、横浜国大付属中学校の校長先生もされており、またご自分でもリサイタルを行うなど非常にお忙しい方である。

先生の予定表には土曜も日曜もない状況のなかで月2回をお願いしたが、当初、とても無理だと言われ困った状況でした。

何とできないかと三拝九拝してお願いし、1週間ほど後にOKのご返事をいただきました。

2015年の5月から「中嶋ゼミ」が月2回のペースで練習を始めることができメドが立ちホットした覚えがあります。

この時から、柔軟体操の方法、声の出し方にも口蓋を開ける、胸を開く、頭声、ムンクの顔、舌の力を抜き、息を真つすぐ帆掛け船の帆にあてるなど発声のイロハから沢山のことを教えて頂いたが、難しくなかなかできない状態が続いた。

(3) 音楽指導と会の運営

団員名簿、出欠席受付簿、会費徴収、会費保管管理などパートリーダーの皆さんとの協力関係を作ったり、先生への謝金をどうするか検討したりした。

幸い小宮先生や中嶋先生は客員教授ですので学校から支出であるが、ピアノ伴奏など実技の先生には謝礼が必要である。実技では、ピアノの新井先生に第九の伴奏をお願いしたが、先生の都合がつかない時のためにもう一人伴奏者がほしいということになり、中嶋先生から村田千晶先生を紹介していただいた。村田先生のピアノを聴いた時、「ホッ、これは凄い」と皆さんが驚いたことを覚えています。

「歌唱指導」は、中嶋先生、荒井先生、村田先生、「西洋音楽史」は小宮先生、さらに「ベートーヴェンの藝術世界」は茂木先生に「ドイツ語」の指導では中川先生が加わり、これで神奈川 SC の第九関係の音楽指導者は 6 人と充実していきました。

平成 27 (2015) 年は、これら先生のご指導を頂き面接授業やゼミが進められた。

練習が進んで行くと、中嶋先生から「ソプラノの音量が足りない。ソプラノを歌える人を探してほしい」とメールを頂いた。そうは言っても普通の大学と違っていつも顔を合わしているわけではないので簡単に見つけることはできないので困りました。

池田所長と相談したが、人探しは「個人情報の問題もあってそう簡単にはいかない」と言われる。

そうこうしてテノールで参加された笹木さんから、「イタリア歌曲を歌う、中嶋先生の面接授業に参加されたなかにソプラノの素晴らしい人がいた」と教えて頂いた。写真を探して持ってきてくれました。

その方にメールを出し参加して頂くようお願いをしたものの、なかなか了解して頂けなかったが、何回目ものメールに根負けしたのか OK してくれました。それが李 艶薇さんや吉村さんでした。

お二人が参加された後は、ソプラノの方々相互に好い影響が出始め、すっかり良くなったが、中嶋先生は、もう少しと更に高みを目指すので練習のたびに宿題が出るようになっていった。

自主練習も始めたが、参加者相互に自己主張が強くなって行き、しっかりとした指導が見つからなかったため方向が定まらず、参加者の意見集約が難しくなっていった。

しばらく、困っていると自主練習に参加されていた天川先生からアドバイスを頂いた。指導者のいない自主練習は効果が上がらないと思います。との一言に背中を押され、池田先生赤松さんと私 3 人で、中嶋先生に相談に伺ったところ、奥村先生（ソプラノ）に発声指導をしてもらうのが良いということになった。

奥村先生は、藝大と付属高校の先生も引き受けられ、加えて地域の合唱団指導、ご自分のリサイタルなど多忙であり、日程が難しい方であったが月 2 回だけの限定でお引き受け頂いた。

高度な指導をお願いするには謝金などが難しい面もあった。

学校から出せないことがわかり困ったが、参加者から徴収している中から支出できる範囲にして頂き練習指導時間を考えることで何とか乗り切ることができた。

人員構成も、ソプラノが 15 人位、アルトが 18 人、テノールが 12 人、バスも 12 人となり 4 声のバランスも少しずつ良くなっていき、これで四声のバランスが取れるようになったと思えるようになっていった。

(4) 合唱団の出演者数

「第九を歌う」奏楽堂は、通常 230 人、詰めても 250 人である。7 学習センターで 50 人ずつだと 350 人になる。各学習センターではそれぞれどのようにして募集しようかと考えていた。

そのうち、文京はこのままだと 100 人くらいまで膨らんでしまうとやってきた。渋谷、足立は練習場所がないので他のセンターに合流することになって、実質的には千葉、埼玉、神奈川、多摩、文京の 5 センターということになった。多摩は練習場所がなく音楽指導の横山先生の学芸大の音楽室を借りて練習することになり 30 人くらいであった。

残る 4 センター各 50~60 人併せて 200~240 人、多摩が 30 人だとすると 230~270 人になる。そうこうするうち、群馬から 15 数人が埼玉に合流し、これでほぼ 245~285 人に膨れていった。

ところが、参加者は、文京が 70 人、千葉が 75 人、神奈川は 75 人、今度は出演人員を絞る必要あり何かしなければならぬということになった。ここが一番辛かったことである。

どうしたものかと中嶋先生と相談しているうちに、千葉 SC は、オーディションをやって 50 人前後に絞ることになった。「他の学習センターもどうぞやって下さい」と宮野所長はやってきた。

神奈川 SC はどうするか??? 私は団員数を絞りたくなかったし、オーディションもやりたくなかった。なぜなら合唱団員が減る可能性が予想されたからである。

奥村先生は、合唱をやるからにはオーディションは付き物です。とオーディションをやりなさいと言われる。またまた困った挙句に中嶋先生と相談したところ、オーディションでなく、参加者の力を引き上げる方法を取る方法にすることにした。一人ずつ歌ってもらい“各自の歌唱へのアドバイス”を先生から頂き、自分の課題としてレポートに改善の目標を記しその改善に向けて各自が努力していく方法ダル。

チェック項目は、A 姿勢、B 呼吸、C 響き、D 音楽的能力(ソルフェージュ能力)、E 発音(子音)の改善すべき点などである。指摘された課題項目は、各自が面接授業、ゼミで改善していくことになる。ところが、半年ほど過ぎた年末の頃から指導も段々厳しくなってきたことと、千葉のオーディションや中嶋先生の「歌唱アドバイス」など、オーディションなどの噂から退会する人が出始め、最高 75 人まで増えた団員が、徐々に減少し 45 人まで減っていった。

その後、会員獲得の勧誘などを続け最終的には 52 名が神奈川の参加申込み者となり、合同練習に臨むことになった。

(5) オーケストラの編成数

オーケストラは、学生の募集から開始された。選考委員は、宮野先生、山本先生、それに茂木先生、さらにチェロの奏者で N 響にいた OB の方(丹羽経彦氏)など 5 人が審査員となってオーディションが行われ、10 数人が受験し最終的に 2 人が合格した。大橋理恵先生(ファゴット)と神奈川の学生 木下健司さん(コントラバス)である。

もう少し枠を広げてくれたらと思ったが、音楽指導の先生方は結構厳しく、プロに交じって演奏するのだからと厳しい選考基準となった。

- ・オーケストラは、藝大の卒業生「東京藝大ストリングス」を中心にした弦楽器・金管・木管・打楽器のグループに指揮者の山本先生が声をかけて 70 数人集めて合奏団を作った。

学生側からの参加者を含め最終的には 75 人の編成となった。

(6) 合同練習始まる

合同練習に参加するには、各学習センターの参加者を確定しなければならない。

神奈川は 52 名になり、文京 SC が 58 名、千葉が 54 人、埼玉が 30 人、群馬が入って 15 人、多摩が 30 人、放国会 15 名くらいということで 254 人、何とか奏楽堂にぴったり収まる人数になりホットした。

・ 昨年 8 月から合同練習が毎月 1 回開始、合計 10 回、文京学習センターの多目的講義室で合同練習を行った。

250 有余名が集まるとその熱気と声量は物凄いと感じた。しかし、ここには筑波大学も使っており、図書室や教室、講義室があるので、他の教室へ音が漏れないようにドアの目張りをしたりして音の漏洩に気を使った。

「文京 SC の多目的講義室、音響はよくないが、ここでやっておくと奏楽堂はより音響効果が 15% ぐらい良いので、奏楽堂に行ったときに良い結果でるのではと思う」と文京の岡野所長の言であった。

(7) 運営委員会・実行委員会

これだけの人をどうやって同じ意識で演奏会まで引っ張っていくか、それには団員への情報共有が一番大事である。所長や音楽指導の先生方、実行委員の決めた事を皆に伝えるために毎月練習日には「An die Freude」を毎月合同練習日発行し、参加者全員に配布することにした。

平成 26 年、学習センターの所長、事務長、音楽指導の先生 10 人合計 24 人からなる運営委員会が編成され、基本方針を決め、それを実行に移すため学生による「実行委員会」を作った。

メンバーは、所長が指名する。各学習センターから 11 名の学生が指名された。

神奈川 SC は、所長から私と赤松さんが指名された。足立・渋谷は各一人、合計 11 名、その後 2 名追加され 13 名で実行委員会がスタートした。

団員への情報連絡は、会報「An die Freude」の作成・配布や、神奈川ではメールの利用などを行った。「An die Freude」の発行は 39 号を数える。その他、全体のホームページなども活用した。

いろいろなことを言われもしたが、やっているうちのうまくいくようになったと思っている。

(8) プログラム作成

運営委員会で、プログラムを学生でつくろうということが決まり、実行委員会に任された。プログラムを作る委員は、文京の杉本さん、渋谷の久保さん、馬場であるが、アドバイスをいただくために茂木先生、時々池田所長に加わっていただいた。

数多くのプログラムを比較した上で、放送大学の特徴を出すために「放送大学の学生らしさをだす工夫をないか」「第九は」何を語りかけているのか。？というところから始めて、茂木先生の講義を受けながら学生相談室で何度も打ち合わせを行った。

先ず、表紙は？ 背景は？ などから始まり、侃々諤々^{かんかんがくがく}いろいろあったが、茂木先生の「第

丸は宇宙から届いてくる」という一言をもとに、それにふさわしい星空の写真に決めた。星空の下段に合唱団のシルエットを入れた。

請負ってくれた印刷会社「彩流工房」の橋本社長から素晴らしい写真を提供して頂いた。こちらの思いを見事に汲んでくれ、感じのよい表紙になったと思っている。

・雑談（プログラムから）（参照：「第九」特別演奏会プログラム）

・白井勝彦理事長は、稲田大学の総長を努められた方で、卒業式でも合唱団の中に入って歌ってくださった。あとから聞いたところによると、第九をやろうと最初に決断してくれた方だそうである。

・運営委員長の宮野先生

指揮者をはじめ音楽指導の先生方を選び協力依頼をして頂き、池田先生と一緒に本部への企画提案をして頂いた。

・指揮者の山本先生は、山本直純さんのご子息で、寺院で演奏会を催したりされておられる。学歌の前奏と間奏を編曲、オーケストラバージョンに作曲してくださった。

・茂木先生、私たちは現在、先生のもとで器楽と合唱のアンサンブルに取り組んでいる。

・最後に、9・10 ページ、第九の難しいシラーの和訳文は多く出版されているが、茂木先生から放送大学がやるのだから学生に訳してもらったらどうかとの一言に、学生から募集することにした訳文は学生から募集することにした。その結果、3名の方が選ばれた。その中に神奈川の中川愛子さんが入った。中川さんの訳は女性らしく「しなやかさとわかりやすさを持つ翻訳」と評価されお褒めを頂いた。今日上映したDVDの字幕は中川さんの作である。

・音楽指導の諸先生の紹介

・「第九」面接授業・講話・サロン・ゼミ一覧

・学生参加者の寄稿、

学生らしさを出そうと「第九」にかける思いを参加者の中から50人（抽選）に寄稿して頂いた。

・加えて、参加者全員の名前を「色紙」に“寄せ書”して頂きしていただき、その中央に赤松さんの書による漢詩を記して頂いた。

鷗陽詢の漢詩を各色紙に一字ずつ入れてもらった。

長楽萬年 : 楽しいことのかぎりないこと

聖心懐之不忘 : 精神これを（おも）うてわすれず

徳感人風動物 : 善行は人を感化せしめ、風教はものを移すことができる

（出展：九成宮醴泉銘、唐 632）

・最後に、このプロジェクトにかかわった人達全員の名前を挙げている。演奏者 334 名、お手伝いいただいた方々を入れると総勢 407 名である。

オーケストラ 75 名、合唱団 254 名

合同練習・各学習センターの合唱練習ピアニスト、音楽指導者、プロジェクト実行委員会、パートナーリーダー、警備・受付会場整理・救護・写真撮影などを行っていただいたサポート委員会のメン

バーです。

4. 演奏会本番に向けて

神奈川では春のフェスタで中嶋先生にお願いして本番一週間前の3月19日に練習模様を公開リハーサルを行った。ソリストは、ソプラノは李さん始め、出川さん、武井さんなど、合唱団も本番と同じドレスコードで演奏のリハーサルを行った。1年前と比べるとずいぶん違うなという印象であった。

終了後、中嶋先生からアイルランド民謡「春の日の花と輝く」を独唱して頂き皆さん感動しました。

・3月25日リハーサル



奏楽堂ロビーで結団式



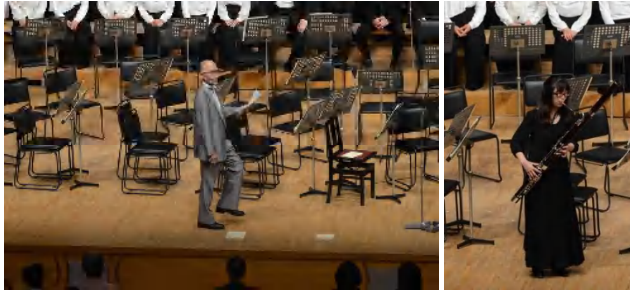
会場においてリハーサル



リハーサルで指揮をされる山本純ノ介先生

5. 3月26日、いよいよ本番

前段では茂木先生がステップで第九のメインテーマを紹介、ファゴットの大橋先生が伴奏した。



茂木先生と大橋先生

前日のリハーサルには出られたが当日体調を壊した人もおり、本番では全員が全員というわけにはいかなかった。実行委員、パートリーダーと相談して、最前列は暗譜で歌える人、二列目・三列目は体調に心配のある人、その上は元気な人、パートの境目にはそれなりの人、最後列には声の慣れている人という配置にした。

- ・コンサートミストレス・長尾春花さんは、山本先生の要請で、ヨーロッパから帰ってきてくれた。
- ・器楽の演奏者は、藝大の学生、OB、いずれもプロやプロになろうとしている人たちである。
- ・ソプラノソロの奥村先生には15ヶ月にわたり、毎月発声の仕方、体操、声の出し方、ドイツ語の発音、歌唱（合唱）のご指導を頂くとともに、多くの教えを頂きました。



「第九」演奏全景

中央はコンサートミストレス長尾春花さん



写真左：指揮者・山本純ノ介先生と4人のソリスト（左から奥村さゆり（ソプラノ）、小川明子（アルト）、小林大作（テ

<打ち上げ懇親会>

写真によって先生方、関係者を紹介(説明省略)



懇親会の後、記念撮影



神奈川のメンバー、前列、右:白井理事長、左:岡部学長、2列目右から一人おいて、奥村先生、中嶋先生

<お礼>

407名からなる多くの方々のご協力、ご支援のお蔭で演奏会が無事に出来たと思います。関係の皆さんに心からお礼を申し上げます。有難うございました。

【質疑応答】

Q1. 全体をとりまとめた馬場さんとして一番苦労されたところは?

A1. いろいろあったが、終わってみると皆よい思い出であります。反省も沢山あります。

東京文京の岡野所長から「第九の反省会」での挨拶の言葉を引いてお答えとします。

「放送大学の学生は年齢が高く、社会経験が豊富で意欲をもって勉強している。それなりの自我もあって、人の言うことは聞かない。しかし、そういう人であっても「第九」ではしっかりとまとまった。ここがすごい」と挨拶されました。私も同感です。

目的がしっかり定まっていれば年齢に関係なく、皆同じ目的に向かっていけるということが実証されたと思います。

Q2. 今回の演奏会は大成功で、馬場さんの功績は大変大きい。私も合唱団の一員として参加した

が、2年間に及ぶ練習と関連する面接授業で、ただ「第九」を歌うということだけではなく多くのことを学んだ。学歌にもあるように、「新しい生（いのち）を開く」という思いをさせていただいた。これからもこの新しい伝統を引き継いで載きたいと思う。

馬場さん、本当にありがとうございました。

A 2. 身に余るお言葉有難うございます。

次はということになると、「今のところ予定はない」と池田所長は言っておられるが、今回は一つの実験ができたと思います

東京文京の岡野所長は、「今回の第九の練習風景を全国に音源を配信して全国に届くか実験をした。今度は一堂に会して歌うのではなく、本部に指揮者がいてタクトを振って映像を見ながら練習をする方法が考えられます。本番はどうか、いろいろ課題がたくさんあるが・・・」と言われた。有名な指揮者の佐渡豊さんがやられているようにコマーシャルベースでならできるが放送大学では中々そうはいかない。費用は今回でも800万円を超えた。学生から一人18,000円集めて総額の半分を負担、学校側は何とか工面して半分負担して載せ、やっと実現に漕ぎつけられたと思います。そういう状況なのでこういう大プロジェクトはそう簡単にはできない。実験はできても実現は中々難しい。しかし、これを一つのケースとして放送大学の文化として育てて載せたいと思っています。

Q 3. 懐かしく思い出しました。練習は大変だったが、それ以上に馬場さんは大変だったのでは？中嶋先生は初めて指導されたときびっくりされたと思う。「皆さんはママチャリに乗って・・・」と言われたが、演奏会のあと、「先生、ママチャリから軽自動に乗り換えて・・・」と申し上げたら「いや、そんなものではない。ターボですよ」と褒めて下さった。

有難うございました。

A 3. 先生方の評価は、

- ・山本先生：5段階評価でいうと、優、それも大きい優ではなく小さい 優 であると言われておりました。
- ・岡野所長：大丈夫かと不安であったが、年齢ではない、ちゃんと纏まっていくことができた。これが素晴らしい。何か目標をもってそれに向かって皆で一つになれば、年齢に関係なくできるということが分かった。放送大学にこんないいところがあるのかと感じた。これが大きい成果だと思います。と言っておられました。

Q 4. 今日は同窓会の弘明寺サロンであったが、同窓会だけでなく多くの方にお集まりいただき有難うございました。私も演奏会を聴き、非常に感激しました。新しい放送大学の歴史を作ったと思うし、さらに全国に広げて行くという考えもあるようなので、期待したい。また、馬場さんはじめ神奈川の合唱団がよく頑張ったと思う。どうも有難うございました。

(まとめ：植地)